Slope DRR News Letter 04

2022年6月2日

自主防災組織の活性化による斜面災害減災力の強化事業

Capacity building of local community for slope disaster risk reduction

JICA Grass Root Program between JAPAN & VIETNAM

1.　2021 年 5 月からの 1 年では何をしたの？

先のニュースレターでは「何とかキックオフ会議を開きました！」と記しました。1 年以上も前です。音沙汰無しで申し訳ありません。この間、コロナ禍は、私たちの活動を継続して制約し続けました。草の根の意義をしみじみ噛みしめる思いで過ごした時間でした。ここでは、これまでに行った 5 つの取り組みを簡単に紹介します。私たちの小さな組織が相手国の小さな地域機関と手を携えて取り組んだ中間報告としてご理解いただければ有難いです。

2.1.　JICA 東北によるメディア企画：

私たちの草の根技術協力は、栗駒山麓ジオパークを抱える栗原市が提案自治体です。2008 年 6 月 14 日に発生した「岩手宮城内陸地震」での激烈な斜面災害を克服する過程で創設したジオパークは、「自然災害との共生から生まれた豊饒の大地の物語」を主題とします。災害を経て、自然を深く学び、先人の知恵や地域の豊かさに思いを馳せる取り組みは、草の根企画の土台そのものです。地すべり・土石流・洪水との付き合い方を紹介するビデオの製作は、私たちの事業に直結し、企画段階から主体的に関わらせて頂きました。今年は発災後 14 年を迎えます。この間 2011 年東日本大震災を経て、地域は漸く復興が見えるようになりました。このビデオは、日本語とベトナム語で作られています。間近に迫った２回目の現地訪問の際に紹介できるでしょう。

2.2.　JICA ベトナム事務所主催の NGO 等向け研修会：

ベトナムを対象国した草の根案件は要望も課題数もとても多いようです。2021 年度の研修会では、私たちの取り組みを紹介させて頂けることになりました。しかしながらコロナの感染拡大は、否応なしにプロジェクトの遂行を妨げています。そこで、紹介するテーマは、１）プロジェクトの立ち上げから展開までをＰＤＭ（プロジェクト・ドキュメント・マトリックス）を用いて紹介する。２）プロジェクト開始時に生じたコロナの感染爆発による行動制限下での工夫。の 2 件を報告しました。初めての経験となった研修会でしたが、日本国内もベトナム側も例年以上の参加だったようで、草の根企画の大事さをヒシヒシと感じて、大いにやる気が出ました。

2.3.　出張手続き

研修会の資料作りを始めた 11 月は、感染拡大が一段落したようにも感じられました。念のために余裕を見て、翌年 2 月の現地入りを想定した入出国文書資料の作製を始めました。コロナ感染爆発の最中にベトナムを訪問する手続きは分からないことだらけでした。両国大使館・JICA ベトナム・ベトナム側関係者・類似の事業者など手当たり次第に問い合わせて、何を・どのように・何時まで準備すればよいかを探りながら申請手続きを進めました。日本側専門家個人情報を抜かりなく整え、出国・入国に伴う各種措置の実際を整理し、招聘状・行動計画書・隔離措置などの書面を整えましたが、筆者にとっての最大の懸念は、コロナ感染状況次第で省境界を越えることが出来ない可能性でした。相手国側の支援機関関係者が奔走してくれたおかげで無事入国し、15 日間程度の現地訪問が実現しました。出国時のＰＣＲ検査でメンバーがコロナ陽性となり、該当者は隔離措置と経過観察で更に 10 日間旅程が伸びました。パスポートには「日本国民

である云々」の一文が記してあります。日常の 10 倍以上にもなった煩雑な出張手続きを通して、国境を超えることの重大さを身にしみて感じました。

2.4. 第 1 回目の現地訪問

2022 年 2 月から 3 月にかけて、ラオカイ省カウンターパート機関、支援機関関係者と共に、初めて現地を訪問しました。現地は寒く、雪・氷のニュースが届くほどでした。コロナは感染爆発の最中、ハノイでは毎日数万人が感染していました。しかし、現地では住民と共に、会議を開き、地図の見方と使い方を考え、現場を確認し、紙芝居を上演し、会食をして、心から来て良かったと共感し合える時を過ごすことが出来ました。ベトナム政府は地域レベルでの防災とそのための組織化の必要性を既に自覚しており、様々な工夫を実施し始めていました。行政当局・地域住民組織・日本側技術者の 3 者が、現場で土を触りながら確認しあえること自体が「目からウロコ」の出会いとなりました。

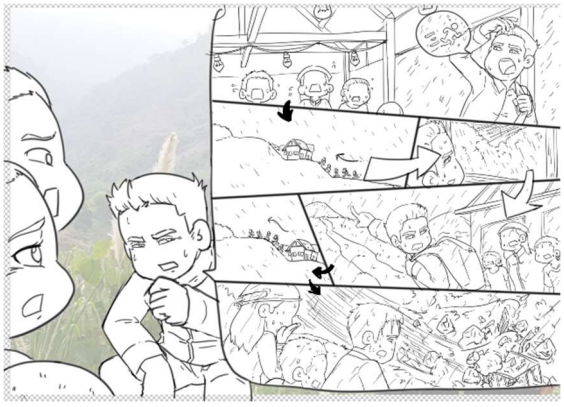
実は、私たちは、斜面災害の実態把握において「根本的なモドカシサ」を抱えていました。日本では、斜面災害を地すべり・斜面崩壊・土石流・落石と明確に定義・類型化しています。ところがベトナムでは、これらの現象を地すべり・デブリフローと纏めていました。行政当局の中には、私たちが予め整備していた地図を見て、「これは何だろう？」と訝る声もあったそうです。

それが現場で歩けば、斜面の変動現象には色々あって、「ある程度類型化しておかないと防災の仕方を見誤るのではないか」との共通認識が生まれたようでした。また地域で避難訓練をする際にも、行政が計画するレベルの地図や情報も大事ですが、住民が「その場所の危険性や安全性」を確認できる「サイトマップ」の必要性も認識できました。ある地区では、地域住民の「もしかして・念のため」を想定した 2 次避難の行動が 100 人もの命を救った事例もありました。

防災の勘所をみんなに伝える紙芝居は、計 7 回上演しました。話し手となったタン君の本気度も弥が上にも増してきました。

2.5. 第 2 回目の現地訪問を控えて

6 月中旬から 2 回目の現地訪問を行います。プロジェクトの中間評価と、ある村で企画する最初の避難訓練が大きな目的です。避難訓練でどんな展開があり、教訓が得られるのかは未知数です。しかしながら、地域住民の意識はとても高いようです。その背景には、この村で発生した斜面災害の記憶、村全体を移転した経験、新しく移り住んだ場所が持つ安全性と危険性への懸念などなど色々あり、住民は身に染みて思いを巡らす必要性を感じているようです。



左：タンビン地区の紙芝居：ここでは、3 人の若い女性達と出会った。彼女たちは何れも土石流で家族や家を失っていた。この経験を地域の防災に生かしたいと語りかけられた。

右：フィンガン地区の紙芝居：地域のリーダーが会議の席上で自らの体験を話し、翌日にその被災箇所を見た。豪雨の夜、突然の停電、土石流を避けるため学校への避難、更なる土石流を懸念して高台へ 2 次避難。学校は土石流で流出した。約 100 名の住民は難を逃れた。